命懸けの告白と潜伏の終わり

1865 年の「信徒発見」の知らせはすぐに黒島にも届きました。島の一部の信徒たちは、何が起こっているのか確かめるため、ひそかに長崎に渡りました。大浦天主堂で彼らは宣教師に信仰を告白し、黒島にも 600 人の潜伏キリシタンがいることを告げました。信徒発見から約 2 カ 月後のことで、禁教令がまだ解けていない中での命懸けの告白でした。

宣教師は彼らに新たな指導を授け、1872 年のキリスト教解禁の一年前に黒島の潜伏キリシタンは全員カトリックへと復帰しました。

復帰の当初は、かつての指導者の屋敷など島内の 2 カ所が仮の聖堂とされました。やがて新たな教会堂建造の機運が高まり、1879 年に初代の黒島教会堂が建設されました。教会堂は各集落から訪れやすい島の中央に建てられました。信徒の増加に伴い、教会堂の建て替えが計画されました。信徒の労働奉仕と費用負担により、1902 年に現在の黒島天主堂が完成しました。黒島天主堂では、今なお当時の絵踏を贖罪する祈りが毎週ささげられ、禁教期の記憶が確実に伝えられています。

黒島全体が世界文化遺産

黒島には 19 世紀に移住した潜伏キリシタンに起源を持つ 6 つの集落が分布しています。指導者の屋敷跡、墓地、生業に関わる土地利用形態が大きく変わることなく残されています。また、潜伏キリシタンがひそかにマリア観音に祈りをささげた興禅寺や絵踏が行われた庄屋屋敷跡、キリスト教解禁後に建てられた初代の教会堂跡も良好な保存状態にあります。

これらの場所は、移住することにより、移住先の社会・宗教とも共生しつつ、自らの信仰組織を維持しようとした潜伏キリシタンの戦略を色濃く表しています。禁教期の潜伏キリシタンと仏教徒との関係を示す 8 つの集落を含む黒島全域が世界文化遺産である長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産の構成遺産となっています。